

少年の日の敗戦

アメリカとの戦争に敗れた時、私は旧制中学の一年生であった。食料難の時代である。九月初めのある日、私は、姉と一緒に山奥の畑にジャガイモを取りに行った。リュックには、ジャガイモがギッシリ詰まっている。妹の手も引かねばならない。

空地大橋にかかったころには、日はすっかり暮れていた。北海道第二の川だ。橋はあきれるほど長い。

その時、後方はるかに、これまで見た事もない強烈な自動車の灯（あか）りが見えた。それも少しくらいの数ではない。

「アメリカだ」だれかが叫んだ。数百台の米軍トラックだったのである。

「戦争に負けたら、言語に絶する扱いを受ける」私たちは、そう教えられていた。我々は橋の真ん中にいる。もう間に合わない。必ずひき殺されるであろう。私は妹をかかえ、走りに走った。

「もう駄目だ」そう思って振り返ったとき、私は自分の目を疑った。何と米軍のトラックは、我々が渡りきるのを待っていたのである。

「これはだまし討ちかもしれない」私たちは走り続けた。渡りきると、堤防の上から転げ落ちるようにして逃げた。全員が渡りきった事を確かめて、大部隊は轟（ごう）音と共に空知大橋を渡って行った。

月の美しい夜であった。「彼らも人間だったのか」そんな複雑な思いで立ちつくしたあの夜のことを、秋になると今も思い出すのである。

（平成 16 年 9 月 9 日付け 東京新聞ショッパー掲載）